

# 記念論文集発刊に際して

余 田 博 通

一

関西学院創立75周年・社会学科開設50周年を迎えるに当たり、記念論文集を発刊し、社会学部における研究を学の内外に問わんとするのであるが、この機会に従来本社会学部に寄せられたる本学内外の御好意・御配慮に深く感謝すると共に、今後とも御鞭撻をいただくようお願いしたい。

さて、われわれはこの機会に75年・50年を回顧し、今後の発展にそなえたいと思うのである。

二

わが関西学院が、米国南メソヂスト監督教会派遣の W. R. Lumbuth 総理によって、兵庫県菟原郡都賀野村内原田村に創設されたのは明治22(1889)年であり、爾後四分の三世紀を経て今年の9月28日は75周年の記念日を迎えるわけである。

W. R. Lumbuth は、「彼と相並んで現代の生みたる二次宣教者として知らるる J. R. Mott 博士、嘗て彼を激賞して曰く、『全米否歐洲全体に於ける最も偉大なる宣教主事なり』と」いわれた程の人であり、「終始キリストの善且つ忠なる僕として席一日も煖まる事なく、旅より旅に日を過しつつ、キューバ、メキシコ、ブラジル、ベルギー、フランス、朝鮮、支那、シベリア、アフリカ及び我国に汎れる数度の旅行をなしつつ専心伝導に従事」したのであって、大正10(1921)年横浜万国病院において66才の生涯を終ったのであるが、彼が日本の地をふんだのは明治19年であった。

米国南部諸州に根拠を有する南メソヂスト監督教会 (Methodist Episcopal Church, South) は、明治18(1885)年日本に伝道地を開く事を決定

し、J. W. Lumbuth, 其の子 W. R. Lumbuth, O. A. Dukes の3名を19年7月に先の伝道地たる支那より神戸に派遣し、次いで9月には A. W. Wilson 監督が日本宣教会を設立、W. R. Lumbuth をその総理に任命して瀬戸内海沿岸地方に伝道を開始した。彼等はその当初より学校経営を志し、米国ミズリー州スプリングフィールドの牧師 W. P. Palmore 氏の後援を得て布教伝道の傍ら英語を教授する夜学校を設けたが、これでは満足することができず、普通学を授けると共に、又一面直接伝道に従事すべき教役者を養成する神学校をも開設することを計画した。これが関西学院である。

明治22年は帝国憲法の発布せられた年であるが、この年に創設せられた学院は諸規則を関西学院憲法として制定(明治25年改正)し、その教育方針を次の如く定めた。「関西学院ノ目的ハ純正ナル基督教ニ基キ日本帝国ノ青年ノ智識、道徳並ニ靈性ヲ涵養スルニアリ」と。(明治25年の改正では、「本学院ノ目的ハ、基督教ノ伝導ニ従事セントスル者ヲ養成シ、且ツ基督教ノ主義ニ拠リテ日本青年ニ智徳兼備ノ教育ヲ授クルニアリ」と。)

最初の21年間は南メソヂスト監督教会によって神学部と普通学部との経営が行われたが、明治43(1910)年に加奈陀メソヂスト合同教会が経営に参加して C. J. L. Bates (後の第四代院長)、D. R. MacKenzie 等が教職に加わるに及び、学院は更に発展することとなった。明治26年より大正5年迄は吉岡美国が第二代院長の職にあって神学部及び普通学部の確立に努力したが、この期間はまた高等学部誕生のための長い陣痛の期間でもあった。

最初の学院史である「開校40年記念関西学院史」は次の如く記している。「学院の使命とする処は、

もと思想的に日本を動かし、東洋を動かす事なり。基督教的思想の下に、広く野に叫ぶの士を育成するにあり。されば神学校の教育の外に、普通学部を設けしなれど、一中等学校存在は思想界に及ぼす力に於て果して何程のものかある。斯くして学院は、必然的に文科的専門学校の存在を要するに至り高等学部を併置するの計画は、殆ど草創の際よりして、局に当る者の胸裡に潜められ、種々考究せられ来りしものなりき。」と。この構想は明治27年の高等科新設に現われ、従来の普通学部6ヶ年を5年制にして、その上に2ヶ年の高等普通科を設けた。翌年これを改めて普通学部普通科4年と普通学部高等科4年としたが、これはハイスクール4年・カレッジ4年の制にならったものと思われる。

しかしこの制度は時期尚早であって、自然消滅となり、明治32年再び高等科設置を計り、予科1年本科4年の普通科の上に3年制度の英語科を設けたが、これも自然消滅の形となった。次いで明治37年には普通学部高等科を復活しこれを普通学部高等部と称したが、これも初めて二名の卒業生を出したもののやはり消滅の運命をたどった。これは当時の徴兵令第13条による認定と専門学校入学者検定規程第8条第一項による指定をうけていない事が一つの重要な理由であった。

明治41年には神学部が専門学校令によって認可され私立関西学院神学校と改称し、上記認定の問題も解決した。前記の如く明治43年からは加奈陀メソヂスト合同教会との共同経営となって高等学部の計画は進んだ。すなわち、明治44年12月22日には高等学部併置計画が発表され、翌45(1912)年には私立関西学院と改称して専門部を神学部と高等学部の二部に分ち、高等学部は文科と商科をおき、修業年限も4ヶ年としたのであった。「初めの計画では高等部に文科、商科、新聞科及び英語国語師範科の4科を含むものを作る予定であった」という。大正4年には「高等学部文科ヲ分チテ英文学科・哲学科・社会学科トス」ることになった。これについては後に詳しく述べたいと思うが、この社会学科は現在の社会学部の濫觴である。大正10年には、文科・商科が文学部・高等商業学部として独立した。

大正8年以来学生と学院当局とは大学昇格の実現を期して努力していたのであったが、その第一歩として原田の校地より当時の武庫郡甲東村の現在地への移転をした。これは創立40周年に当る昭和4(1929)年であった。この移転は懸案であった大学昇格の実現を速め、昭和7(1932)年には大学予科が開設され、昭和9年4月より法文学部と商経学部が開講せられたのである。以来15年その間戦時戦後の激動期を経て、昭和23(1948)年4月には新学制による新制大学として発足し、昭和27年には社会事業学科が設置された。

第二次大戦後は、社会現象の複雑化と共に特に昭和30年以降はその変化が急速であり、経済・社会・政治の変化につれて社会学の理論の深化および社会学の応用の広汎なる分野の研究が社会的に要請せられ、また社会病理現象の拡大と共に社会福祉部門の研究にも期待される処が大となったので、より一層広い場においてこれらの諸研究を有機的に統合して行ない、学生を教育するために、文学部社会学科と社会事業学科とを基礎として社会学部が昭和35(1960)年に設けられた。翌36年には文学部社会学科・社会事業学科を廃し、その学生を社会学部に編入したのである。なおこの年理学部が新設された。以上は極めて簡単な学院の75年史であるが、次には社会学部に焦点をしばってみることにする。

### 三

学院において高等教育を行うことの意義は先述した所であるが、普通教育・高等教育を一貫している学院精神について40年史は、「尊皇愛国の思想、家族的親愛、基督教の信仰、祈祷と伝道との精神、熾烈なる正義観、社会と接触し、活きたる学術、奉仕の生活、国際的精神、これ等は所謂学院精神の主なる要素をなすものにして、既に開校に際し昭々乎として認められし処、また現在に於て、はた将来に於て、永く高調せらるべきものたるべし」と述べているが、明治45年高等学部開設に際しその部長として任命された C. J. L. Bates は、この学院の精神を“Mastery for Service”というモットーで表現した。

さて、かかる精神と校訓をかかげて出発した高等学部の学科課程を文科について見るならば、次の如くである。

学 科 目	第一学年 (毎週時数)	第二学年 (毎週時数)
英 語	10	10
英 文 学	3	6
国 文 及 漢 文	6	4
聖 書 緒 論	2	
基 督 伝 学		2
心 理 学	3	
社 会 学		2
数 学 又 ハ 歴 史	3	
哲 学 又 ハ 経 济 学 又 ハ 物 理 学		3
体 操	3	
時 数 合 計	30	29

第三学年及第四学年

- 一、右両学年ニオケル授業時数ハ二十六時、中二時ハ体操トシ必修トス。
- 二、残余二十四時中十二時以上十六時以内ニ於テ、左記第一類乃至第四類ニ至ル或一類中選修科目ヲ選択スベシ。
- 三、残余ノ時数ニ対スル科目ハ其他ノ類中ヨリ随意選択スルヲ得。但シ一類ニ付三時ヲ超過スベカラズ。

第一類 語学及文学  
(二学年間)

英 語	16
国 文 及 漢 文	12
仏 語	4
独 語	4
拉 典 語	2
希 臘 語	2

第二類 学  
(一学年間)

高 等 心 理 学	3
論 理 学	2
形 而 上 学	3
哲 学 史	3
倫 理 学	3
審 美 学	2
宗 教 哲 学	3
音 楽	2

第三類 歴史及社会学  
(一学年間)

日 本 歴 史	3
支 那 歴 史	3
希 臘 及 羅 馬 歴 史	2
中 世 及 近 世 歴 史	3
英 国 史	3
社 会 学	3
経 济 学	3
政 治 学	3
法 学	3

第四類 理学及数学  
(一学年間)

高 等 数 学	3
物 理 学	3
化 学	3
地 質 学	3
鉱 物 学	3
天 文 学	3
植 物 学	3
動 物 学	3
生 物 学	3

第五類 商 業  
(一学年間)

簿 記	3
商 業 地 理	3
商 業 歴 史	3
商 業 通 論	2

「このプランは当時日本に帰らたてのマシウス教授があちらのカレッヂの例にならって作られたものでそのまま持って来た処に無理がある」。すなわち文科の学科目が当時の時勢に適せざる嫌があった為か、入学者は少なくまた校門を去ったり他学部へ転じる者もあるという状態であったので、程なく学科改正の議が生じた。大正4年1月6日附で文部省へ申請し、同年2月8日学則変更の認可があった。学科目及び授業時数は次の如くである。

第一学年

英 語	12
国 文	4
漢 文	2
聖 書 緒 論	2
論 理 学	1
心 理 学	2
歴 史	2
音 楽	2
体 操	3
毎 週 時 数	30

(随意科目)

経 济 通 論	2
法 学 通 論	2

第二学年

(第二学年以降は社会学科のみを記す)

英 語	10
基 督 伝 学	2
西 洋 哲 学 史	2
社 会 学	2
高 等 心 理 学	2
歴 史	3
生 物 学	2
国 法 学	2
憲 法 及 行 政 法	2

経 济 学	2
体 操	2
毎 週 時 数	31
(随意科目)	
近 代 語	5
商 業 学	2
簿 記 学	2
第三学年	
英 語	10
倫 理 学	2
西 洋 哲 学 史	2
現 代 政 治 史	1
財 政 及 経 济 法	2
民 法	2
刑 法	1
政 治 学	2
体 操	2
毎 週 時 数	24
(随意科目)	
近 代 語	5
東 洋 思 想 史	3
経 济 史	2
商 業 学	2
計 理 学	2
第四学年	
英 語	8
文 明 史	2
社 会 学 演 習	2
社 会 政 策	2
経 济 及 財 政 事 情	2
国 際 法	2
商 法	2
新 聞 学	2
体 操	2
毎 週 時 数	24
(随意科目)	
近 代 語	5
比 較 宗 教 学	2
商 業 学	2
植 民 及 外 交	2

その後多少の改正があったが、このカリキュラムが基本となっている。ところでこの改正は「文学部回顧」によれば「ベーツ部長や小山東助文科長及び甲府時代からベーツ院長と力を合せてその行政に秀でていた木村禎橋教授等が相談して最も日本の現状に適応したものに作り直した」ものである。木村禎橋は「関西学院60年史」で次の如く述べている。「大正3年文科振興のため文科長小山東助教授から学科課程改正の議が提議されたが、商科も他日の発展のため課程改正の希望があったので、改正案を作った。……文科の構想は

相当広汎なものであり、英文学科、哲学科、社会学部の三学科とし、英文学科の最上級を純文学部と英語教育（師範）部の二部制を設けるものであった。……文学部その他の隆盛を見るに至ったのは、この学科課程改正の成果といい得るであろう」と。商科の改正は主として木村により、文科の改正は小山によって行われたのである。このような改正を行って文学部の基礎をきずいた小山文科長・ベーツ高等学部長の功績は、商科の木村禎橋教授・松村吉則商科長のそれと共に永く忘れることのできないものである。

大正9年9月には功績多大であった J. C. C. Newton 第三代院長職を退き、第四代にベーツ院長が就任した（この年8月に阪急神戸線開通）。この年4月頃から研究せられていた両科の独立は、翌10(1921)年4月1日に実現して文学部 (H. F. Woodsworth 部長) および 高等商業学部 (神崎驥一部長) となった。これは商科・文科の性質の異なった両科の統轄の困難が生じたためである。

文科は最初の数年間、英文学科以外には専攻学生がなかったのであるが、大正初期の労働問題・社会問題および社会思想は青年学徒の強い関心を引き、大正7年入学生の過半は社会学科を専攻することになり、以後年々卒業生を世に送り出し社会学科の基礎は定まって特異の存在として世間の注意を惹いたのである。大正7年には河上丈太郎が自身は「官学出身者であります、私学の意義を高く評価し……殊に mission school の価値を高く評価し……日本文化に対する意義——基督教の教育の日本社会に於ける価値を強く意識して」教授として就任した。彼は「この文科を大ならしめて学院全体の権威を高めたいと思い……自分の過去の学問的立場よりして文科の社会科を充足することがこの目的に適うものと思い、社会科の完成に全努力を傾倒しました」と「60年史」に記している。「大正8年になり当時の一年の社会科の学生が上級に進むに及んで、私だけでは手薄となりました。学生もこれを察知して学院に対し社会学の専門の教授を呼ぶことを要求して参りました。その結果、当時広島高師の教授であった高田保馬氏を招いて社会学の講義をして貰いました。……学生の不満も同氏の学問的努力により

おさまりました。……大正10年4月学院の機構の変更がありました。……ここで文学部が名実共に独立し mission school の権威と意義を高めるに一般の境地が開かれました。殊に同年社会科としては新明正道君を教授として迎えたことは特筆すべきことであります。この人が吉野作造博士の紹介で学院に来られ、高田氏に代って社会学の講義をせられ社会科の基礎を強固にせられました。同君がその後5年間東北大学の社会学の専任教授として赴任せられるまで、学院のために尽された努力はなみなみならぬものがありました。……文学部は学内に於ても対社会的にも厳然たる存在となり、且つ学生の数も多くなったのでハミル館が狭くなり……大正12年に文学部の新校舎が竣工せられました。……この年に松沢兼人君が教授として赴任せられ……社会政策の方面を担当せられ、社会科として私と新明君、松沢君と三人の専任教授があり、十分学生の期待に沿うに至りました。大正15年新明君が東北大学の招聘をうけて学院を去られたあとは、小松堅太郎君がその逞しい理論で社会学の講義をせられました。その間講師として赤松五百磨君、阪本勝君も来院学生に好影響を与えられました。……学院は私の30代の生涯を献げた処でありますので、去っても心はいつでも学院にあります」と。社会学科は小山東助教授により創設され、「年30才で学院に来り、年40才(昭和4年5月)で学院を去」った河上丈太郎教授によって培われたといっても過言ではない。この間河上教授を始め社会学科の教授は各地に講演して啓蒙し、学院の声価を高めたのである。また大正11年6月、社会学科学生は社会学会を創立し、大山郁夫・長谷川如是閑両氏の講演会を皮切りとして活動を開始し「社会学会雑誌」を発行したりした。なお社会学科学生が中心となり昭和2年には新聞学会の創設をみた。

以上われわれは社会学科創設前後よりその確立期の約15年間を簡単に顧たのであるが、社会学科開設の大正4(1915)年より数えて46年目に社会学部となり、昭和39(1964)年すなわち今年は50年目の記念すべき年である。

#### 四

関西学院創設以来の75年も、社会学科開設以来の半世紀の年月も決して坦々たるものではなかった。とりわけ社会学科の初期は、組織も設備も全く不充分極まる状態であったが、これを育ててきたのは教授と学生の意気と思想と努力であった。

社会学科の事実上の創設者たる役割りをはたしたのは、先述の如く小山東助文科長であったが、彼は、大正2年9月に赴任した。「文学部回顧」は次の如く記している。「当時、早稲田大学の新聞科講師であった小山東助氏がこれ亦同郷人である木村禎橋教授の熱心なる懇望によって文科長として来任。なにしろ、吉野作造氏、内ヶ崎三郎氏等と共に海老名弾正門下の三秀才といわれていた人だから大したもんである。文科長として来任するやその抱負は素晴らしいもので根が一流新聞の記者であったし、基督者としても堂々たる論陣を張って、当時有名だった『六合雑誌』や『新人』『基督教世界』の論客だったというのだから、新興文科の建設者としては百パーセントの人物たるを失はない」。「文科長としての小山教授の意気込みは実にはり切ったものであって特にその説教なんかに至ってはいつも腹の底から出ている力強い叫びであり、インスピレーションに富んだもので、いつも話をする時には両手を拱いで、その語調は人をひきつけずにはおかず、若人に絶えず新しいものを与えていた。理想家であり、思想家であり、文学者でもあれば、哲学者でもある。よき説教者であり、mistic なる人であり、政治家としても宗教家としても当代稀に見る大人物であった。文科がこうした人を得たという事は何といっても大いなる強味でなければならなかった」。学院は大いなる期待をもって彼を迎えたのである。

彼は明治12年11月24日宮城県気仙沼町に生まれ、後仙台第二高等学校を卒業、東京帝国大学文科哲学科に入学し、大学基督教青年会寄宿舎に入舎、在学中海老名弾正氏の本郷教会に関係し、屢々雑誌「新人」に感想を発表した。島田三郎氏に私淑し、卒業後同氏主宰の東京毎日新聞社に入社した。氏は郷里鼎が浦にちなみ鼎浦と号したが、

30才の時「今茲はダルウキンが始めて生物進化の論文を公にしてより恰かも満50年の記念歳に当る」明治41年に「社会進化論」を書き、翌42年に博文館より出版した。この年新聞社を退き早稲田大学講師となり、倫理及新聞研究科の諸講座を担当した。43年に東京日々新聞に入り思潮評論を担当したが、病を得て早稲田大学及び東京日々を退職し、45年には「六合雑誌」「新人」「基督教世界」等に沈痛なる宗教的体験を発表した。大正元年9月には再び早稲田大学講師となり同時に千葉県立園芸専門学校でも講義した。関西学院「高等学部を主宰するベーツさんは、日本に来るとすぐ最初の友人を内ヶ崎君に於て見出した。僕は6月の下旬、内ヶ崎君に紹介されて始めてベーツさんと上野公園に逢った。3、4時間10年の知人でもあるかのように、愉快に手を握る幸福を得た」。これは大正2年のことであったが、9月には病床にあった菊野子夫人を茅ヶ崎に残して单身学院に赴任した。在任1年有余、大正4年1月28日午後2時からカレッジのチャペルにおいて次のような意味の1時間半にわたる告別演説をして翌29日神戸を去ったのである。彼は「幼時に『佳人の奇遇』や『経国美談』など好んで読んで居た頃、1日島田三郎氏の政談演説会を会場の外より聞いた。そして其の頃より政治家の生活というものに幾分宛の興味を惹いた。高等学校から大学へ行く時も哲学科へ行こうか、法科へ行こうかということは長い間の問題であった。そして1日誰れかの文章の中にプラトンの『真の政治家は哲学者にして始めてなり得る』という引用句を見付け出して、自ら哲学科を選んだ。而して当時内村鑑三氏の東京独立雑誌や海老名教師等に仍って宗教という新しい世界がわが前に開かれた。此に於て政治家たらんとする心、学者たらんとする心、宗教家たらんとする心、この3つの心が断えず争闘していた」と。遂に政治家たらんとする心もだし難く、学院を辞し郷里にて理想選挙を標榜して衆議院議員に立候補して当選したのは大正4年3月であった。次の大正6年の選挙では最高点を獲得した。憲政会に属し7月3日の国会では、時の超然内閣寺内首相に対し、「言論圧迫ニ関スル質問」をなし、この年3月のロシア革命が何故起ったかを説き、

言論の自由を主張して活躍したが、7月3日咯血、8年8月25日40才で永眠した。

彼の内には学者であり、宗教家であり、政治家であろうとす心の相剋があったのであるが、彼の短い生涯はこれらの心の変遷であった。学者たろうとした心は、ダルウキン・スペンサー・ウォレス・ハックスレー・ドラモンド・クロポトキン・キツド・バルドウウキン・ウオード等を論じた著書「社会進化論」となり、宗教家たらんとする心は、「予が踏み来し道」「耶蘇の福音」「福音の真髓」を含む著書「久遠の基督教」となり、政治家たらんとする心は「民本主義」の衆議院議員として「大正維新」の活躍となったのである。

この30才代の文科長を招いたという事は関西学院を大きく前進させる契機となった。彼の在任は極めて短期間であり、またその間の言動を詳かにする事は今できないが、以上にみただけでもその影響力が極めて大きかったであろうことが想われる。彼の主張によって哲学科・社会学科が開設せられたのは大正4年とせられるが、大正3年2月雑誌「英語世界」第8巻2号（蔵内教授提供）の学生募集広告によれば、既に文科は哲学科・英文学科・社会学科に分けられている。察するに小山教授は着任間もなく改正を申し出て、学院内では社会学科・哲学科の開設を決定し、事実上は大正3（1914）年4月から実施にふみきったのではないかと思われる。ここに社会学科の草創を求めらば、今年の3月末で満50年になったわけである。認可された学則変更による社会学科が発足した大正4年4月には彼はすでに学院を去っていたのであったが、彼の構想は徐に河上丈太郎によって実現されてきたというべきであろう。

## 五

以上において、関西学院の75年、社会学科から社会学部への50年、学科創設者小山東助教授について簡単に記してきたのであるが、このようにして築かれてきた歴史をふまえて、われわれは前進しようとしており、社会学部としての第5年目を歩みつつあるのである。社会学部発足後満4年、よりよき社会学部への整備の段階に達したこの際

に、建学の精神および社会学科草創の理想と精神を確認し、将来の発展に備えたいと思う。

“Mastery for Service” という校訓は、「真理將使爾自主」という Old Kwansai の校訓をベーツ院長が具体化したものであり、これが学院教育の主軸となっているのであるが、私はこれを社会学部においては次の如く再具体化して説いている。USOC は社会学部の略称であるが、これにちなんで “Understanding, Sedulity and Originality for Contribution” と唱道している。すなわち、物事の根源にまで立ち入って批判的に知るといふこと、without deception ごまかしなく念入りにまじめにたゆまず努力すること、創意・独創力・創造力を養うよう努めること、そのような知的能力によって社会に奉仕し貢献する事が基本でなければならないという意味である。

社会学科の草創は大正4年(事実上は大正3年)の文科の改正によること前記の如くであるが、この時の事情について昭和6年の「文学部回顧」は次の如く記している。「この新文科長の樹てたプランというのが、現文学部の構成の基礎をなしているもので、むしろこの時のまま現在に至っているといってもいい位のもの。殊に社会学科設置に関する功績は大いなるものといわねばならない。英文科設置は学院としては当然の事であったが、特に小山氏の主張した事は、ミッションスクールはどうしても Social worker を作るべき使命を持っているという事であって、そのため新聞科、社会事業科といった様なものをおかねばならぬという事を熱心に主張し、社会学科という名称についても、或は法律科、法政科、さては経済科といった案も出て、社会学科という様な名称は漠然としているなどと主張した人が多くあったが、そうした限られたものでなくもっと伸び得る、総合的社会指導理論把握の為めどうしてもこの名称でなければならないと断然その主張を通してしまったわけである。……又すべての根本には哲学が重きをなすという信念の下に哲学科の設立をも主張して文科の根本的プランを完全に作ってしまった」と。ここに小山文科長による社会学科草創の理想と精神は明らかである。

彼は先輩師友より多くの暗示を得たとして、建

部遯吾の「社会学序説」「社会理学」や、やがて出版せらるべき「社会動学」、浮田和民の「社会学講義」、遠藤隆吉の「近世社会学」をあげている。彼はその著「社会進化論」において幾多の進化論をとりあげ批判検討しているのであるが、その最後に L. F. Ward (1841—1913) の社会静学・社会動学を含む純正社会学および応用社会学に深い関心をよせている。このような学識を基礎として彼は第一に総合社会学の研究のための社会学科を主張したものと見ることができる。

また加うるに彼の基督者としての宗教的体験と理想とが基礎となって、基督教主義学校の使命として社会事業に貢献しうる Social worker を作るべしとする第二の主張がなされた。

彼はまた学院を辞する直前の1月1日付の論文「社会革新の眼目」(鼎浦全集第3巻所収)で、「今日の我国に於て最も緊要な社会的革新の題目は、少くとも二つある」とし、労働対雇主の関係の社会問題と婦人問題を重要視し、労働者および婦人の自覚をよびかけているのであるが、これらを含む社会革新に自由な言論のはたす役割りを大きく評価し、すぐれたジャーナリストの養成をも主張したものである。註「基督の精神は、単に個人靈魂の救済を全うするのみならず、社会状態の一新を求むる」からである。

そして以上のような教育をなす為の基礎条件として語学教育を重要視したことは当時のカリキュラムに明らかである。

われわれは50年後の今日、当初社会学科として構想された姿を社会学部として備えるに至り、教授12名、助教授10名、専任講師8名、宗教主事1名、助手4名計35名を擁するに至った。最近社会学部を新設しようとする大学も幾つか見られるのであって喜ぶべき気運であるが、目下の処東京地方以外には唯一の然も長き伝統をほこる存在であるわが社会学部は、それだけに、姿勢を正して草創の精神と理想とを体し、昨今実業界の要員として必要とされる技能教育もさることながら、さらに一段と広いまた高い立場に立って、社会を批判的総合的に認識し、改革し、創造しうる能力を有し、社会に貢献することのできる明日の国際的視野を有する日本人を「人作り」すべく努力しなけ

ればならない。

**註。**彼は大正6年7月3日衆議院において、時の首相寺内伯に対し「言論圧迫ニ関スル質問」演説をなしたが、その中で次の如く述べている。「露西亜革命の現はれた後、言論取締の方針が復た極めて強くなつて、其結果として政友会所属の方と思いますが、彼の岡喜七郎氏の主宰して居る雑誌「新公論」も発売禁止せられたのである。……此論文は一種の学術研究の論文である。是は人の知る所であります。併ながら此発売禁止になつた為に、純粹なる学問を以て立つて居る人々は、其研究を自由に発表する勇氣を失つたのである。是に就ては寺内伯に深く御考を願はなければならぬと思ひます。此一箇の学術論文が発売禁止になつた結果、**新聞記者**又**大学教授**等高き思想を有つて世の中を導く立場に居る人々は、自分の研究を自由に発表する勇氣を失ひまして、自から筆を執ることを恐るゝやうになつたのである。

日本帝国の思想の発達に取つて非常なる障害と考へます。……苟も一國文化の源泉である大学教授**新聞記者**は沈黙を守つて言論界は極めて平凡な黄茅白草の觀を呈して來ました。斯様な言論のみ跋扈して雛形のみ議論が世に重んぜられるやうになりました。我帝国の興隆の機運を拒絶することになりはしないかと本員甚だ之を憂ふるのであります。」

この一文を草するに當つては、「開校40年記念関西学院史」「関西学院50年史」「関西学院60年史」「関西学院70年史」「文学部回顧」「鼎浦全集」三巻を資料とし、資料をして語らしめるように努めた。とりわけ最初のもつと最後の二つの資料は貴重であつた。煩を避けて、引用箇所を明示しなかつた。

(1964. 7. 25記)